# 博雅の三位と鬼の笛

十訓抄

大意　博雅の三位が月夜に朱雀門で笛を吹いていると、すばらしい音色が聞こえた。互いに言葉を交わさないまま、月夜のたびに吹き合い、試しに笛を取り替えて吹くとまたとない名笛である。博雅の死後、その笛を名手浄蔵に吹かせると、これが鬼の笛であることが分かった。

◎第一段（博雅の三位と見知らぬ男との笛の合奏）

博雅の三位、月の明かりける夜、直衣にて、朱雀門の前に遊びて、夜もすがら笛を吹かれけるに、同じさまに直衣着たる男の、笛吹きければ、誰ならむと思ふほどに、その笛の音、この世にたぐひなくめでたく聞こえければ、あやしくて、近寄りて見ければ、いまだ見ぬ人なりけり。我もものをも言はず、かれも言ふことなし。かくのごとく、月の夜ごとに行きあひて吹くこと、夜ごろになりぬ。

管弦を楽しんで　晩中　この世にくらべるものがないほどにすばらしく聞こえたので　不思議に思って　幾夜にもなった

◎第二段（笛の交換と博雅の三位の死去、その後の笛）

かの人の笛の音、ことにめでたかりければ、試みに、かれを取り替へて吹きければ、世になきほどの笛なり。そののち、なほなほ月ごろになれば、行きあひて吹きけれど、「もとの笛を返し取らむ。」とも言はざりければ、長く替へてやみにけり。三位失せてのち、帝、この笛を召して、時の笛吹きども に吹かせらるれど、その音を吹きあらはす人なかりけり。

意志・終　やはり同様に何か月にもわたって　完了・用　亡くなって　取り寄せて　当時の笛の名手たち　その笛のもつすばらしい音色

◎第三段（浄蔵の吹笛と名笛「葉二」）

そののち、浄蔵といふめでたき笛吹きありけり。「召して吹かせ給ふに、かの三位に劣らざりければ、帝、御感ありて、「この笛の主、朱雀門の辺りにて得たりけるとこそ聞け。浄蔵、この所に行きて、吹け。」と仰せられければ、月の夜、仰せのごとく、かれに行きて、この笛を吹きけるに、かの門の楼上に、高く大きなる音にて、「なほ逸物かな。」と褒めけるを、かくと奏しければ、初めて鬼の笛と知ろしめしけり。「葉二」と名づけて、天下第一の笛なり。

（帝が）　使役・用　補動（尊敬・体）　感心なさって　やはり特別にすぐれた物だなあ　（帝に）奏上したので　声　分かりなさった

【解答例】
一・当時の名手たちが出せなかった笛の音色を、博雅の三位は美しく奏でることができた。
・誰もが吹きこなせなかった笛を、見事な音色で吹くことができた。

## 課題

一　博雅の三位が笛の名手であったことは、どのようなことからわかるか、説明してみよう。

二　「鬼の笛」（15・6）だとわかったいきさつを、順を追って整理してみよう。

二　略（指導書参照）。

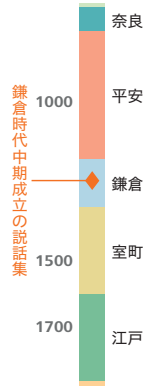
## 語句と表現

一　次の傍線部の用言を文法的に説明してみよう。

①月の明かかりける夜、（14・1）　①　ク活用形容詞「明かし」の連用形（下に助動詞が付くためカリ活用となっている）

②得たりけるとこそ聞け。（15・3）　②　ヤ行下二段動詞「得」の連用形

③高く大きなる音にて、（15・5）　③　ナリ活用形容動詞「大きなり」の連体形




**1 博雅の三位**　源博雅（九一八～九八〇）。平安時代中期の貴族。管弦の名手として知られる。官位は従三位であった。

**2 直衣**　男性貴族の日常服。（↓巻末(1)）

**3 朱雀門**　平安京大内裏南側中央にある正門。朱雀大路に面する。（↓巻末(9)）

**4 浄蔵**　八九一年～九六四年。平安時代中期の僧。天文や管弦など、多方面に通じていた。

**問❶**「この笛の主」とは誰のことか。　博雅の三位。

**5 葉二**　横笛の名器。赤と青の二枚の葉が笛に描かれていたことによる。

**＊語句**

遊ぶ　夜もすがら　めでたし　あやし　夜ごろ　やむ　失す　召す　給ふ　仰す　なほ　奏す　知ろしめす　「言ふ」の尊敬語　絶対敬語（天皇・上皇への謙譲語）

**◈十訓抄**
説話集。編者は六波羅二藤左衛門入道（伝未詳）といわれる。一二五二（建長四）年の成立。約二百八十編の教訓的な説話を、十項目に分類して載せる。本文は『新編日本古典文学全集』によった。